

イエスと聖霊

——聖霊のバプテスマ——

村上 久

はじめに

与えられた主題はイエスと聖霊である。この主題で私に求められていることは、発題依頼文からすると、二つある。一つは、ヨハネとイエスの聖霊理解が、「その時代のものよりも、特にペンテコステ以後到来する時代における聖霊の働きについて、イエス、またヨハネがどのように理解していたか」を問うことである。今一つは、そこには聖霊に関する一貫した理解があったのか、もし「一貫した理解があるならば、それはどのようなものかを探る」とである。

したがってここでは、福音書の中で福音書記者たちやヨハネやイエスが聖霊全般に関していかなる理解をもっていただかということについては、この主題における研究の対象としない。聖霊は旧約時代にも、福音書の中でも顕著な働きをなしている。事実、聖霊はイエスの誕生において決定的な役割を果たし、彼の生涯を導いた。バプテスマ

のヨハネの誕生とその生涯にも、また聖書に登場する他の者たちとも深く関わっていたことが証言されている。むしろここでは、聖霊に導かれて歴史に登場したバプテスマのヨハネが、救いの歴史の中で画期的な出来事として預言し、自らの使命がその道備えにあると理解していた、メシヤによる聖霊のバプテスマをその研究の対象とする。

聖霊のバプテスマに関する理解と解釈が多様であることは周知の事実である。時としてこれが誤用されたり乱用されたりしている。パウロの書簡においても、聖霊のバプテスマを受けなさい、という勧めは出てこない。御霊に満たされること、御霊にあつて歩むこと、御霊の火を消さないこと、御霊を悲しませないこと、などの勧めはある。聖霊はすでに教会と共に臨在し、その共同体に属するすべての者の内に臨在しておられることが自明の理とされている。課題は聖書のことばそのものに基づいた聖霊のバプテスマの意味と、このことばの用法の正確な理解が必要である。まず、ヨハネの預言そのものの意味を調べ、ヨハネがこの預言をいかに理解していたかを探っていく。さらに、イエスがこの預言をどのように理解しておられたかを問う。そしてこの重大な歴史的意味をもつ預言がいつ、どこで、どのようにして成就したかを解明し、それに関する一貫した理解があつたかを問いたい。そのために、共観福音書の記事、特にルカの福音書と使徒に見られる預言の成就の理解とヨハネの福音書に見られるその書特有の理解を、聖書神学的視点から学んでいくこととする。

I バプテスマのヨハネの預言

一、本文とその意味

宣教を開始したバプテスマのヨハネは悔い改めのバプテスマを説いた。すると、「ユダヤ全国の人々とエルサレム

の全住民が彼のところへ行き」(マルコ一・五)、一日の道のりを歩いてヨルダン川でバプテスマを受けた。まるで蟻の行列のように町とヨルダン川とが人で埋まったはずである。エルサレムの町全体が移動した。この町とその住民を激震させたヨハネの登場であつた。

ヨハネは来たるべきメシヤについて、「私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。」(マルコ一・八)と説き、彼の水のバプテスマが聖霊によるバプテスマの準備に過ぎないことを告げたのである。本文では、私とその方、水のバプテスマと聖霊のバプテスマ、の対比が強調されている。

ところが本文上厄介な問題がある。マルコの福音書ではイエスのバプテスマが「聖霊」によるバプテスマと記しているが、マタイとルカの福音書では共に、「聖霊と火」とによるバプテスマと告げているからである⁽¹⁾。どちらが本文上正しいのだろうか。ヨハネは「聖霊」とだけ言ったのか、それとも「聖霊と火」と言ったのか、また、その本文がいかなる意味で語られたのかも問われなければならない。

前世紀の終りごろから提唱されている見解に、ヨハネが説いたバプテスマは聖霊によるバプテスマではないという説がある。マタイとルカが用いたQ資料の「聖霊と火とのバプテスマ」の言及に続いて語られた、「また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、穀を消えない火で焼き尽くします。」(ルカ三・一七)を根拠に、対比は裁きでなければならぬと解釈している。そして聖霊のバプテスマは初代教会が行なっていたバプテスマの影響を受けて、後日付加されたものであると主張する⁽²⁾。また、*nevya* が風とも訳されることから、風と火によるバプテスマであつたと解釈する者もいる⁽³⁾。いずれもバプテスマを火による裁きと滅びの比喩として解釈している点で共通している。バプテスマをあくまでも裁きに限定しているのである。これらの解釈にはいくつかの点にお

いて問題がある⁽⁴⁾。ヨハネの宣教は基本的には良き音信である。マルコにとってヨハネの働きは「イエス・キリストの福音のはじめ」(一・一)である。来たるべきお方のバプテスマも「聖霊」によるもので、「火」はなぜか記されていない。マタイにおいては、ヨハネの宣教の内容がイエスのそれと全く同じ、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(三・二、四・一七)と記録されている。ルカにおいては、ヨハネの働きはイザヤの預言、「あらゆる人が、神の救いを見るようになる。」(三・六)の成就として描き、その働きを要約して、「ヨハネは、そのほかにも多くのことを教えて、民衆に福音を知らせた。」(四・一八)と記している。この大動脈となる脈絡のなかで脱穀と滅びの比喻は理解されなければならない。脱穀してきよめることにも福音的側面がある。消えない火で穀を焼き尽くすと同時に、麦を倉に納めることが述べられているからである。また、クムラン教団からの証言もこの理解を支持している⁽⁵⁾。

本文はもつと素直に読まれるべきである。霊、又は聖霊が否定される理由はない。マタイとルカの記述にも、マルコの記述にも、共通して *neuria* と書かれているのだから、これを除外することには無理がある。「聖霊」のバプテスマを説いたのである。ではなぜ、マルコに「火」が欠如しているのだろうか。マルコに「火」が欠如している説明が必要であるが、決定的な説明は見当たらない。恐らくマルコは意図的に「火」を、それが意味する裁きの思想をあえて除外しようとしたのかも知れない。或いはペンテコステの出来事を念頭においていたからかも知れない。本文の意味についてはその解釈は多様である。ある者は聖霊と火とを同格において、聖霊の火によるバプテスマと解釈している⁽⁶⁾。また、二つのバプテスマが語られていると解釈し、一つは義人のための聖霊のバプテスマで、今一つは悪人のための火のバプテスマであると主張する者もいる。しかし、本文から導き出される解釈は明白で、聖霊と火との一つのバプテスマを語っている。来たるべきお方から聖霊と火とのバプテスマを受ける人たちはヨハネ

が水でバプテスマを受けた同じ人たち (*hairs*) であり、聖霊も火も同じ一つの前置詞 (*in*) によって支配されているからである。

本文の文脈からしても、裁きの要素が含まれていることは否定出来ない。旧約の預言者たちも火を裁きの意味で用いている。(イザヤ三二・九・アモス七・四・マラキ四・一) また裁きであつても滅びではない用法もある。(イザヤ一・二五・ゼカリヤ一三・九) 特にマラキ書に見られる用法は興味深い。「だれがこの方の来られる日に耐えられよう。だれがこの方の現われるときに立っていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。この方は、銀を精練し、」(三二・二一―三三・a) とあるように、滅びし尽くさない精練する火について語っている。他方、「見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。」(四・一) と、焼き尽くす火について語っている。つまり、精練する火と焼き尽くす火とが同時に語られているのである。ヨハネの用法の背景にこの理解があつたと考えてよいのではないか。

聖霊理解も預言者から学ぶ必要がある。イザヤは度々 *ruah* をきよめと裁きの霊と理解している。(四・四一・三〇・二八) 時として報復的・破壊的な意味で用いているが、神の民にとって *ruah* は祝福と繁栄と義をもたらしものでもある。(三二・一五―一七・四四・三) ヨハネはイザヤの語る「主がさばきの霊と焼き尽くす霊によって」(四・四) エルサレムの汚れをすぎきよめるといふ教えや、主の日に聖霊の注ぎがあるということを知っていたはずである。このように旧約の預言者たちの用法を概観して分かることは、「霊」の用法に「火」の意味も含まれているということである。したがってこの小論では福音書の用法を一つに統一し、便宜的に「聖霊のバプテスマ」として用いることにする。

ヨハネのバプテスマに代わるものとして、来たるべきお方の聖霊のバプテスマが二者択一的に提供されているのではない。そのお方のバプテスマを避けるためにヨハネのバプテスマを受ける訳でもない。むしろ、来たるべきメシヤの聖霊によるバプテスマに備えて、水のバプテスマを受けるのである。聖霊のバプテスマは福音であると同時に裁きをも含んでいる。悔い改めた者も悔い改めなかった者も皆一様に経験するのである。前者にとっては祝福となり、後者にとっては滅びとなる。ヨハネは終末に実現する神の国の宣告者で、主の大きいなる恐ろしい日が来る前に遣わされるエリヤの役を担っている。(マラキ四・五)だから、ヨハネは声を大にして、悔い改めよ。その日が全き滅びとならないで、贖いとなるように、と叫んでいるのである。

二、ヨハネの水のバプテスマの意味

ヨハネの水のバプテスマの役割はいかに理解されるべきか。メシヤの聖霊のバプテスマとはいかに関わっているのか。結論ははっきりしている。それはあくまでも備えてある。ヨハネが終末をもたらすのではない。神の国は近づいているが、しかしまだ実現していない。聖霊のバプテスマを授けられる来たるべきお方によって実現するのである。それに備えて、悔い改めを求めているのである。ヨハネは罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説いた。バプテスマそのものが罪の赦しをもたらすのではなく、バプテスマは罪の赦しをもたらす悔い改めの表現である⁽⁸⁾。また、儀式そのものが罪の赦しをもたらすという考えは旧約の預言者の教えからも否定される。クムラの教団でも同じ考えが確認されている⁽⁹⁾。

II ヨルダン川での出来事 — イエスのバプテスマと聖霊の注ぎ

ヨルダン川でイエスはヨハネから水の水のバプテスマを受けられた。その時、天が裂けて御霊が鳩のようにイエスの上に下り、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」(マルコ一：一二)との天から声があった。

聖霊の働きはこの出来事において初めてあかされた訳ではない。イエスの誕生において聖霊の働きは顕著である。イエスが知恵と恵に満ちて成長されている記事も聖霊の存在と深く関わっている。イエス以外の人たちに関しても、同様の記事が書かれている。しかしながら、こうした聖霊の働きとこのヨルダン川の聖霊の注ぎとは区別されなければならぬ。この出来事はこれまでの一連の出来事のなかの一つの出来事ではない。単に個人的な経験でもない。神の救いの歴史の中で起きたユニークな出来事である。この区別を明確にしておく必要がある。まず天からの声であるが、これは旧約聖書の詩篇二七とイザヤ四二一からの引用である。イエスが担うべき使命に関わる出来事であった。ここでイエスが油注がれた王であるダビデの末から生まれるメシヤであり、受難のしもべとして民の罪を代わって担うという仕方において、贖いのわざを全うするメシヤであることが告知されたのである。福音書記者たちは、したがって初代教会は、この出来事がイエスがメシヤとして御霊の注ぎを受けられた時と一様に理解している。歴史的には、ここにおいてイエスははじめてメシヤと呼ばれ、ここにおいてははじめてメシヤとして機能されるようになり、したがってここにおいてははじめてメシヤの時代が始まったと言えるのである。この時、御霊の注ぎを受けたメシヤにおいて、預言者たちの終末的希望が成就した。その成就の始まりがここにおいて起きたのである。天が裂けるといふ描写は黙示思想に共通してみられる表現で、天的領域がこの地上の領域に入り込んで来たことを示している。イエスはここで鳩のように下った聖霊の注ぎを受け、天からの声を聞いた。鳩もまた終末の意味をも

つ表現である¹⁰⁰。新しい時代のはじまり、新しい契約を意味することからも、イエスによる新しい時代の到来を告げると共に、使命を受けたイエスの働きに力と権威を備えさせた出来事であった。(使徒一〇・三三八) このようにこの出来事は神の救いの歴史における特別な出来事として位置づけられなければならない。救いの歴史における新しい時代の始まりを告げているからである。終末のはじまりである。(ヘブル一・一二) メシヤの時代のはじまりである。新しい契約のはじまりである。十二才の時に神殿を訪れたイエスはその後十八年間、ナザレで大工の仕事をしながら会堂で聖書を学び、自らの独自性を理解し思索の時を過ごされたに違いない。そしてヨハネの出現は、イエス自身の時の到来を、ナザレを発つ時が来たことを告げるものであった。

この出来事の独特さはヨハネの宣教とイエスの宣教との違いに見られる。ヨハネにとって終りの時は差し迫ってはいるが、「まだ」である。神の国は、「まもなく」したら到来するが、まだ実現していない。ヨハネは先駆者である。道を備える者である。来たるべきお方の来臨を告げる者である。イエスの宣教は明確である。「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これにはいろいろとされています。」(ルカ一六・一六) 人の子による裁きについては、未来形で書かれているが¹⁰¹、他方神の国の預言がすでに成就した、厳密に言えばその成就が始まったと告げられている¹⁰²。ヨハネの「まもなく」が「現実」となっているのである。「わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来てくるのです。」(マタイ一二・二八) 預言者らが語り告げた終りの時がすでに到来している。この決定的な転換はいつ起きたのか。答えは明白である。それはあのヨルダン川の出来事、天からの声と聖霊の注ぎにある。なぜなら神の国の到来の預言が成就しているとの響きは、明らかにこの出来事のことにおいて聞こえはじめるからである。イエスはヨハネが捕らえられて後、神の福音の宣教を開始された。「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を

信じなさい。」と。καρποςとは神の定められた時、終末の神の国の実現の時で、それが満ちて来たこと、イエス自ら宣言されたのである。イエスはナザレの会堂で預言者イザヤの書を読み上げ、会衆がイエスに注目していると、「きょう、聖書のみことばが、あなたがたが聞いたと通り実現しました。」(ルカ四・二一)と語られたのである。イエスの内に御霊が現臨し力ある働きをなしているからこそ、神の国がすでに来ているのである。

ここで度々議論されている、イエスの神の子として、またメシヤとしての自意識に関わる事柄に少し触れておこう。福音書記者たちの関心事はイエスのメシヤとしての心理的・自意識的ことからは向けられていない。すなわちヨルダンでの聖霊の注ぎがイエスの内にかかる変化をもたらしたのかとか、その人格や自意識にかかる影響を与えたのかとか、という問に答えようとはしていない。福音書記者たちはむしろ、救いの歴史における新しい時代の始まりとして、この出来事に注目している。

ルカは聖霊の注ぎがイエスに新しい役割をもたらしたと考えている。これはルカがその福音書の一章と二章で書いている聖霊の役割を否定しているのではない。それと矛盾した発言をしている訳でもない。なぜなら、その誕生の時からある意味においてイエスはメシヤであり、神の子であると言えるからである。しかしまた、別の意味でイエスがヨルダン川の出来事においてメシヤとなり、神の子となった、とも言えるのである。イエスがヨルダン川でバプテスマを受けた時、天からの声を聞き、聖霊の注ぎを受けたが、その時までイエスは油注がれた者ではなかったからである。天の声は「あなたはわたしの子」と告げた。これは丁度、イエスの復活と昇天がイエスを主ともメシヤともしたと告げているのと全く同じである。ペンテコステの日にペテロがヨエルの預言を引用しながら説いた。「すなわち、神は今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」(使徒一二・三二) 十字架と復活と昇天がイエスを「主ともキリストとも」したと表現されている。

III 聖霊のバプテスマとその成就

一、キリスト者のバプテスマ

はじめに、聖霊のバプテスマとはキリスト者のバプテスマのことであるという見解を取り上げる。この解釈の論拠は聖霊のバプテスマのバプテスマをそのまま水のバプテスマとしているところにある。ところがバプテスマという言葉そのものは、必ずしも水を特定するものではない。「あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」(マルコ一〇：三八)などで明らかのように、バプテスマが隠喩として用いられている。それと同じように、聖霊のバプテスマは明らかに隠喩と理解すべきである。これはヨハネとメシヤの働きを最も対照的に描くための修辭的技巧である。聖霊のバプテスマは隠喩的に解釈されるべきで、ある特定の水の儀式に言及しているのではないことがわかる¹³⁾。

eyō' ēgāntoa vīārs vōari, avōrs. sē Barīōsei vīārs nuevūari ayīā

二つのバプテスマのコントラストが鮮やかである。強調語は *eyō'* と *avōrs*, *vōari* と *nuevūari ayīā* で、水は聖霊と対置されており、ヨハネのバプテスマを後のバプテスマと峻別している。

ヨハネの福音書では、ヨハネは三度も自分のバプテスマが水によるものである、と語気を強めている。(一：二六・三一・三三) エルサレムの議会はヨハネが行なっていたバプテスマという儀式に終末的意義を認めていたのであるうか、ヨハネに関する委員会を組織し調査に乗り出た。その時ヨハネは徹頭徹尾自分がキリストではなく、自分はその声にすぎないことを強調した。来たるべきお方は「世の罪を取り除く神の小羊」(二：二九)で、ヨハネが授ける水のバプテスマとは異なり、「この方こそ、聖霊によってのバプテスマを授ける方である。」(一：三三)と。こ

れがヨハネの宣教の内容である。ヨハネの水のバプテスマはキリストの聖霊のバプテスマの陰であり象徴であることを示唆している。二つのバプテスマの対照はヨハネとイエスの間の対照——準備と成就、陰と本質——である¹⁴⁾。

二、イエスが授けていた水のバプテスマ

次に、聖霊のバプテスマの預言は、すでにイエスの生涯において成就しているという見解を取り上げる。この解釈の論拠はイエスが水のバプテスマを授けていたと言われている本文(ヨハネ三：二二)に置かれて、この水のバプテスマこそ約束の聖霊のバプテスマであると解釈する¹⁵⁾。この解釈は聖霊の注ぎに関するイエス自身のことばの意味を伝えている福音書記者の言葉で否定されなければならない。(ヨハネ七：三九)

三、ペンテコステの出来事

聖霊のバプテスマの成就については、それをお授けになると言われていたお方、イエスご自身のことばにその答えが求められなければならない。イエスは昇天を前にして言われた。「エルサレムから離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もうまもなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けられるからです。」(使徒一・五) ルカの福音書と使徒の働きは一人の人の手になることから、両書の一貫した全体的構成を見ることができるといえる。イエスと御霊との関係においては、イエスの誕生における御霊の創造のわざ、ヨルダン川での「主の霊がわたしのの上にある。主はわたしに油をそそぎ…」の預言の成就としての御霊の注ぎ、そして、聖霊の注ぎを受けられたイエスが、弟子たちに約束の聖霊のバプテスマを授けられたとするペンテコステの出来事へと至る一貫した流れがある。その都度、イエスは聖霊との新しい関係に入っていくことができる。御霊によるイエスの誕

生からメシヤとしての使命を歴史的に受けられた御霊の注ぎへの転換はヨルダン川の出来事であり、ヨルダン川の出来事から弟子たちの上に注がれたペンテコステへの転換はイエスの十字架と復活の出来事である。

ところが、バプテスマのヨハネが期待していた神の国の実現や御霊のバプテスマの預言は、彼が考えていた通りには展開していかなかった。来るべきお方が新しいメシヤの時代をもたらす、悔い改めた神の民がそれに入るものと信じていたヨハネは、その預言が現実に成就しているようには思えず、その確信さえ失い始めていた。そこでヨハネは彼の弟子たちをイエスのもとに遣わして、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの人を待つべきでしょうか。」と、尋ねさせた。するとイエスは旧約聖書を引用して、その預言がご自分において成就していると告げられた。

バプテスマのヨハネは聖霊のバプテスマについていかに考えをいだいていたのであろうか。残念ながら彼の考えを正確に知ることは出来ない。しかし、それが新しい時代の、メシヤの時代の、聖霊の時代の、神の国の実現と深く関わっていると理解していたことは確かである。ルカにとってペンテコステはイエスのみわざのクライマックスである。彼の目は、イエスの宣教の当初から、イエスが授けられる聖霊のバプテスマに向けられている。(ルカ三・一五―一七) 昇天の時にも、それがまもなく成就することが期待されている。ペテロの説教のなかでも、復活の後にイエスが神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それを彼らに注がれた、と説いている。(使徒二・二九―三三) ルカの視点からすると、イエスの働きは十字架と復活で終るのではなく、昇天と聖霊のバプテスマの出来事に終るのである。したがって、ヨハネが預言した聖霊のバプテスマはペンテコステの出来事において成就したのである。これが共観福音書の著者たちと初代教会の共通した理解であったことが明らかとなる。

ペンテコステの出来事はイエスの働きの継続的な働きの単なる一つの出来事ではない。約束の成就は新しい時代、これまでに存在しなかった御霊の時代の到来を告げる。福音書と使徒の働きを著わしたルカは福音書を昇天で終え、第二の書を昇天をもって始めていることから、昇天をイエスの物語の終りと新しい時代―聖霊の時代―の開始の軸と考えていたようである。使徒二・三三はイエスが御父から聖霊を受けて注がれたと語っており、その意味ではイエスの御霊の時代とも言える。このようにペンテコステこそはヨハネの預言の成就の出来事であり、聖霊のバプテスマは新しい時代の決定的しるしとなったのである⁴⁸⁾。ここに神の新しい民、*ekklesia* が誕生したのである。「わたしの教会を建てます。」と言われたイエスのことばが実現したと言えるのである。

IV ヨハネの福音書の記述との関係

聖霊のバプテスマに関して、「ヨハネのペンテコステ」と呼ばれている本文との関係が一つの問題を提起している。その本文とは復活後のイエスが弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい。」(二〇・二二)と言われた記事のことである。これはヨハネが証言した、「聖霊があの方の上にとどまって、その上にとどまられるのがあなたがたに見えたなら、この方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方です。」(一・三三)と、いかなる関係にあるのだろうか。その預言の成就として、この本文が解釈されなければならないのだろうか。ここまでの学びで、共観福音書と使徒の働きの記事から確認されたことと、すなわちこの預言がペンテコステの出来事において成就したことと、どう関わっていると理解すべきであろうか。容易に答えが出せる問ではない。

この問題に関する見解は大きく分けて三つある。一つは著者ヨハネがペンテコステについて全く知らなかったとする説である。第二の解釈は、聖霊のバプテスマは二回あったとする主張である。第三の見解はイエスが弟子たち

に息を吹きかけられたのはペンテコステにおける実際の聖霊の降臨を予見して、演技された譬話であると解釈される。この福音書の著者がペンテコステについて何も聞いたことがなく、全く知らなかったとは到底考えられない。また、聖霊が二度にわたって弟子たちに注がれたと考えることには無理がある。生ける水がイエスを信じる者の内に流れ出ることに触れて、著者が解説をしている箇所がある。「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまた栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ注がれていなかったからである。」(七・三九) イエスの昇天後に聖霊は注がれると言われていることになる。弟子たちがその宣教の働きに遣わされたのは、ペンテコステの後であった。したがってラッドなどはこの本文を「演技された譬話」(played parable)と解釈して差し支えないと論じている¹¹⁹。いずれにしても明解な解答がないというのが真実であろう。

これでは与えられた課題に答えられないままになる。そこで別の視点からこれを検討してみよう。四つの福音書と使徒の働きは一樣に裸の物語を伝えてくれている訳ではない。また、相互に補いあうために書かれている訳でもない。ルカとヨハネとの両福音書が同じ強調点と目的をもって、同じ視点から書かれている訳でもない。したがって、はじめからヨハネ二〇・一二二を使徒二章のペンテコステに関連づけて、直線的に比較してはならないことになる。ヨハネ二〇・一二二はこの福音書の文脈で理解し、後者はルカの思想の脈絡の中で解釈されなければならない。その上で、両方のテキストを比較すべきである。

ヨハネの福音書の一つの特徴としてその神学的枠組に着目したのである。ここではイエスの働きにおける決定的な出来事—死と復活、昇天と聖霊の賜物—がそれぞれ個別に独立したものととして取り扱われておらず、むしろそれらが一つの統一されたものとして提示されている¹²⁰。このことが顕著に見られるのが、δοξαζεινの用法である。著者は栄光の出来事に読者の視線を向けさせ、神のわざの決定的な栄光のδοξαを指示している。しかも、それらが

別々の出来事としてではなく、一つの栄光のわざとしてである。δοξαζεινの用法を考察すると、これが必ずしも一つの出来事にのみ言及しているのではないことがわかる。それぞれの出来事に現わされる栄光の時を一つの統一された時として捉えていると言えよう¹²¹。また、ψωυの用法に関して、ただ単にイエスが十字架に架けられることを意味するだけでなく、天に上げられることをも意味していると、すなわちψωυが昇天をも意味しているというのである¹²²。しかし、指摘されている本文を詳しく調べていくと、ψωυが昇天に言及しているとするものがある。すれば、三・一四以外に見当たらないのである。興味深い研究ではあるが、資料に欠けると言わざるを得ない。

この福音書の著者の神学的パースペクティブから言えることは、イエスの贖罪の行為を—死と復活、昇天と聖霊の注ぎ—の枠の中で統一された全体として捉えていることである。以下で取り扱うΠαράκλητοςの研究からも明らかにされるが、救いは人の子が天に上り聖霊を注ぐことによって完成されると理解されている。この基本的な神学的枠組と思想は、ヨハネ二〇・一二二の「聖霊を受けなさい。」とどう関わってくるのか。この関係を理解するためには、著者が歴史的・時間的経過そのものに視点を定めておらず、これらの時間的経過をもつ出来事の神学的統一に関心を向けていることを把握しておく必要がある。例えば、マグダラのマリヤに出会ったイエスは「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。」と書かれているのに、共観福音書ではイエスが婦人たちに出会って「おはよう」と挨拶され、彼女たちに近寄ってイエスの御足を抱いて礼拝したと記録されている。(マタイ二八・九)

Παράκλητοςについても基本的な神学思想は同じである。イエスの告別説教の主要なテーマは、イエスの働きとΠαράκλητοςの働きとの間の継続性である。聖霊の働きと御子のそれとは並行関係にもある。また、一四・一六でθεῖος Παράκλητοςと表現されていて、最初のΠαράκλητοςが去って後、その働きを聖霊が取って代わるのだ

と教えている。またイエスは聖霊によって弟子たちと共におられることになるとも言えるのである。「しばらくするとあなたがたは、もはやわたしを見なくなりませう。しかし、またしばらくするとわたしを見ませう。」(一六・一六) イエスが上げられてから聖霊は遣わされる。聖霊が注がれるためには、イエスが栄光のうちに上げられなければならないのである。

また、二〇・二二との関係で、その直後に続く本文にも触れておかなければならない。「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」いくつかの解釈上の困難な問題がある。イエスは聖霊を受けた弟子たちに、罪を赦したり赦さなかったりできる権威を授けられたのか。そこにいた弟子たちだけに限定されて授けられたのか。個人的なことがらとして与えられたのか、それとも一つの群れに対して与えられたのか。結論的にいえば、聖書が一貫して教えている罪の赦しの権威は神にのみに属することであることから、弟子たちであろうが教会であろうが、その権威が神から離れて存在することはありえないのである。もしそうでなければ、受肉・十字架・復活は何のためであったのかわからなくなってしまう。福音の本質が失われることになる。イエスは教会にも特定の選ばれた人々にも、罪を赦す権威を授与してはおられない。権威があるとすれば、それはあくまでも託された権威である。イエスのみわざのゆえに、罪の赦しを宣言する使命が委ねられたと理解すべきである^四。

これまでの考察を総合的に判断しても、決定的とは言えないまでも、一つの方向が見えて来ている。福音書と使徒の働きが共通して支持する、聖霊のバプテスマがペンテコステの出来事において成就したとする理解と比較しても、そこに矛盾があるとは言えない。イエスが約束された Παράκλητος は二〇・二二で、すなわち復活の日に成就しているとは言えないし、そう主張してもいい。特にこの福音書においては聖霊は父から遣わされると、特徴的に語られていることから推察できるのである。

V 結びに

バプテスマのヨハネは、聖霊のバプテスマが来たるべきお方によってもたらされ、この方によって神の国が実現すると説いた。しかもその実現が間近に迫っていると告げた。彼の使命はその道筋を整えることである。彼は人々をメシヤへと導く声である。終末の約束がこの方によってまもなく成就しようとしていることを確信して、ヨハネは与えられた道を歩んだ。だがヨハネが聖霊のバプテスマをいかに理解していたのかと問うならば、それは定かでない。その具体的成就に関して彼自身の言及はない。だがヨハネは、来たるべきお方のバプテスマが新しい時代、メシヤの時代、聖霊の時代、そして神の国の実現の時と深く関わっていたと確信していたことは確かである。

歴史に登場して来たイエスはヨルダン川でヨハネから水のバプテスマを受けた。その時聖霊がイエスの上に下った。天からの声はイエスの使命が何であるかを明確にした。聖霊が下るその方こそ、聖霊によってバプテスマを授けるお方であると知らされていたヨハネは、この出来事を見てイエスが来たるべきお方、キリストであると確信するのである。だが彼の確信が揺らいだ。イエスのわざを獄中で聞いたヨハネはイエスのもとに彼の弟子を遣わして尋ねる。「おいてになるはずの方は、あなたがたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」(マタイ一・二二) イエスのわざはヨハネが期待していたものとは異なっていたのである。そこには彼が説き人々を待望させた聖霊のバプテスマもなければ、火のバプテスマもない。神の国はいまだに実現していない。この世は今までのままで、何も変わっていない。ヨハネは自分の召しとメッセージを疑ったことはなかったと思う。彼が疑問に思った

のは、イエスが力をもって神の国を実現する来たるべき本当のお方なのかどうか、ということであった。イエスはイザヤのことば(三五・五一六)を引用して、それが彼の働きにおいて成就していることを告げられた。イエスはまた、ヨハネが主の大きいなる恐ろしい日を告げるエリヤであると語られた。(マラキ四・五・マタイ一・一四)ヨハネは預言者の中では最後の預言者で、彼と共に律法と預言者の時代は終わったとも説かれた。したがってイエスの登場は、救いの歴史の決定的な転換点となるのである。「女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。」と語られたイエスは、「しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。」と告げられ、神の国の実現という歴史の一大転換とその画期的意義を指摘された。

ヨルダン川の出来事に関して言えば、イエスが聖霊の注ぎを受けられたということになる。これはその生涯における一連の出来事の単なる一つの出来事として捉えてはならない。これはイエスの宣教と使命に関する決定的な出来事なのである。イエスは天から、メシヤとしての使命をその性格と共に、受けた。神の国の約束の 때가満ちた。神の国の実現の 때가来たのである。この聖霊のバプテスマはイエスが新しい時代の実現を開始されたことを意味した。しかし、ヨルダン川の出来事はバプテスマのヨハネが約束した聖霊のバプテスマとは異なっている。その約束はイエスが授与者となるお方だからである。この出来事をもっての意味は大きい。歴史のある時点における新しいことの始まりと深く関わっている。聖霊がイエスの上に下だったヨルダン川の出来事は、歴史的に一つの新しい時代への突入を意味する出来事だからである。それは歴史を二分する重大な出来事だったのである。

それでは、ヨハネのメシヤによる聖霊のバプテスマの預言は、いつ、どこで、どのようにして成就したのだろうか。結論は決定的である。ペンテコステにおいて成就したのである。福音書記者のなかでもルカは復活の出来事とペンテコステの出来事とを注意深く区別していることが指摘されている⁸²。「わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。イエスは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」のイエスのことばは、その他の解釈の可能性を全面的に否定し、聖霊のバプテスマがペンテコステの日に決定的に成就したことを確認するものである。

最後に残る課題はヨハネの福音書の一・三三と二・二二の関連についてである。この福音書のもっている、救いの成就としてのイエスの出来事を十字架と復活、昇天と聖霊の賜物―歴史的に起きた個別の出来事としてではなく一つの神学的統一として捉えている特徴を考慮する時、この福音書のこの記述をそのまま直線的にルカ―使徒の枠組に当てはめることは出来ない。この福音書の著者は歴史的・時間的経過を無視したり曖昧にしたりしているのではない。むしろその歴史的・時間的経過とその事実を認めたくなくて、それを土台にして神学的テーマを展開しているのである。このように理解していくと、第四福音書のペンテコステと使徒の働きのペンテコステとの二つのペンテコステを想定する必要はない。むしろ、時間的経過という視点からすれば、ヨハネの預言の成就がペンテコステの出来事に求められても、なら本文と矛盾することはないのである。

この結論は明らかに、ペンテコステ以後において教会で理解されていた聖霊のバプテスマの預言とその成就であったと言える。この小論の中心課題から多少離れることではあるが、この結論の適応として述べておきたい事がある。このペンテコステの出来事が個人的な体験の枠にはめ込まれたり、個人の日常生活経験に解消されてはならない。ペンテコステは一度限りの、神の救いの歴史における決定的出来事である。使徒の働きのなかに類似の記事があるが、だれもが普段に経験する日常的なこととして書かれてはいない。それらはキリストの教会が神の直接的な介入によらなければ、乗り越えられない壁を前にして起きている、異例の出来事として位置づけられているのである。その典型的な例は、ペテロが神の直接の介入による異邦人コルネリオとの出会いを通して、初めて異邦

人も使徒二：三八の約束にあずかることが出来ると信じさせられた出来事に見られる。ペテロは使徒の働き十章に至って初めて、福音の普遍性を受容されたのである。

〈脚註〉

- (1) ペテロ三：一―ヨハネ三：一六は²⁵「*ἐν πνεύματι ὑψίστου*」の後²⁶「*καὶ πνεύ*」が続く。²⁷
- (2) V. Taylor, *The Gospel according to Mark*. (London, 1963) p.157, ㉞ ㉟ C.B. Briggs, M. Dibelius, R. Bultmann, J.M. Creed, T. W. Manson, W.F. Flemington, ㉞㉟。
- (3) C.K. Barrett, *The Holy Spirit and the Gospel Tradition*, (London, 1947), p.126, ㉞ ㉟ A.B. Bruce, C.H. Kraepling, E. Schweizer, F.W. Beare ㉞㉟。
- (4) James D.G. Dunn, *Baptism in the Holy Spirit*, (London, 1973), p.9-10
この教団は²⁸神の聖霊(または聖霊)に²⁹「*ἐν πνεύματι*」され³⁰か³¹ち³²め³³たり³⁴精練したりする力として語られている。³⁵ (IQS3:7-9:42; IQH16:12; frag. 2:9)
- (5) Leon Morris, *New Testament Theology*, (Grand Rapids, 1986), p.192
- (6) Leon Morris, *New Testament Theology*, (Grand Rapids, 1986), p.192
イザヤ三三：一五；四四：一三；ホセキエ三九：二九；ヨハネ二：二八以下；ゼカリヤ二：一〇
これは次の本文参照しても確認される。使徒三：一九；五：三一；一〇：四三；一一：一八；一三：三八；二六：一八
IQS3:3-9
- (7) Lohmeyer, *Markus*, p.21, 25；C.K. Barrett, *Tradition*, p.39；Taylor, *Mark*, p.16 ㉞㉟の解釈によれば、鳩は「神の霊は水の上を動して行った。」(創世記一：二)との本文から、神の霊を象徴してゐるとする。また、ノアの洪水で方舟から放たれた鳩を想起させてゐる。
- (8) ペテロ三：二四―二六；ペテロ三：三〇；ルカ二：三四―三五
- (9) C.H. Dodd ㉞ *The Parables of the Kingdom*, ㉞ 神の国は実現されたところから Realized Eschatology を説いた。後に、修正をする「*ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν*」に代つて R.H. Fuller ㉞ *The Mission and Achievement of Jesus* ㉞ 彼の釈義的根拠に基づいて、神の国は現実となつたと言ふ。また、実現をめぐらぬ面のあるところを列挙して、開始された神の国 (Inaugurated Eschatology) 論を陳述してゐる。
- (10) ペンテコステのエルサレムやカイサリヤでも、聖霊のバプテスマがキリスト者のバプテスマとは区別されており、独立したものであることが明らかになっている。
- (11) Edwyn Hoskyns, *The Fourth Gospel*, (London, 1947), p.224, C.K. Barrett, *The Gospel according to St. John*, (London, 1955), p.187
- (12) C.H. Dodd, *The Interpretation of the Fourth Gospel*, (Cambridge, 1970), pp.309-311
- (13) イザヤ三三：一五；三四：一六；ホセキ。一一：一九；三六：二六㉞；三七：四―四四；ヨハネ二：二八f；マルコ一：八；ヨハネ七：三九；使徒二：一七；三三：一九；二；ローマ：九；コロソント三：三―六八；クプレ六：四f
- (14) G.E. Ladd, *A Theology of the New Testament*, (Grand Rapids, 1974), pp.289f
この項は³⁶㉞ James D.G. Dunn の洞察に負つて³⁷大である。
- (15) James D.G. Dunn, *op. cit.*, pp.173-174
- (16) *ibid.*, p.174 の見解は釈義的にも課題が大きい。
- (17) G.A. Turner & J.R. Mantey, *The Gospel according to John*, (Grand Rapids : Eerdmans) pp.393-394
- (18) S.L. Gilmour, "Journal of Biblical Literature" (1962), 81, 63

(日本バプテスト宣教師・津豊ヶ丘教会牧師)